

水産野生動物保護学界の女性リーダー

Rebecca Field (インタビュー)

Rebecca Field は、1988年10月以来、連邦政府の水産野生動物局 (Fish and Wild Life Service) の管轄下にあるマサチューセッツ野生動物共同研究所の所長である。野生動物共同研究所は、アメリカ全土に40カ所あり、それぞれの地域で、大学等の他の研究機関と共同して調査研究を行っている。これらの共同研究所が全米に設立されて50年になるが、所長に就任した女性は彼女が初めてである。(インタビューは横田啓子による。)



photo credit: Jim Gipe

野生動物が好きで

— どうして野生動物研究の道を選ばれ、どのような経験を積んで現在のポストに就かれたのですか？

「野生の動物と共にいることが大好きなのです。どんな形であれ、楽しんでいることを仕事にでき、給料をもらえて好運です。幼い頃から野外で鳥や動物と遊ぶことが大好きだったので、私のキャリアはすでに少女の頃から始まっていた。

子供の頃、家族は農場地帯に住んでおり、両親は私がキャンプしたり、鳥を観察したり、動物と遊ぶことを奨励し、私が科学者になることは良いことだと感じるように導いてくれた。私は化学実験セットを持っていて、人形より好きだった。父は医者、母は保健婦で、両親の科学への興味が間接的には私が科学者になることを助けたと思う。両親は私が科学がよくできることを褒めてくれ、そのおかげで私はいつも科学に秀でていた。このような成長過程が私の後のキャリアに大きく影響した。

1964年から68年にかけて、ウィスコンシン大学で生物学と動物学を専攻し、動物行動学に興味を持つようになった。68年にミネソタ大学修士過程に進学し、鳥の行動研究をした。それからオレゴン州でティンバーウルフ（狼）の研究をした後、78年にジョンホプキンス大学で博士号を取得した。ずっと動物行動学を研究してきたので、卒業後はもっと広範囲の野生動物の応用研究調査をしたいと考えた。教職ではなく、現場に出て、手を汚して実地に調査したかったからだ。それで、水産野生動物局で働くことにした。国土や自然にかかわり、全国的な規模で使命感を持って働ける点が気に入ったからだ。

初めの2年間、ワシントンの共同研究所で、生物学専門スタッフとして働いた。一度ワシントンのオフィスに入ってしまうと、たいていは官僚機構の出世競争に巻き込まれ、野外調査はとても難しくなるのだが、私は現場での仕事を希望し続け、良い上司に恵まれたおかげでメリーランド州の田舎にある研究所に転勤できた。そこで3年間、生物学者として研究した。83年に夫がアラスカ転勤になり、私は退職して彼について行った。

アラスカでは、水産野生動物局が時々短期の仕事をくれたが、失業の身だった。しかし、野生動物学者としては、アラスカに住めるということは素晴らしいチャンスだと考えた。実際は、私が考えていたよりも厳しい状況で、アラスカにいる人はそこが好きでいる人が多いので、仕事をやめる人は少なく、仕事を見つけるのは困難だったので、とても辛かった。ようやくアラスカの水産野生動物局へ転勤という形で仕事を得た時は、もう2年も経っていた。それまですごく落ち込んだりもしたが、やっとアンカレッジでの仕事に就けた。」

— それはどんな仕事でしたか？

「北部のアラスカ横断石油パイプライン沿いで、石油やガスの採掘が自然や野生動物に与える影響を調査する仕事だった。夏の3カ月間、国立北極圏野生動物保護地域に滞在し、ツンドラ地帯に住む鳥の習性や生息地を調べるキャンプのリー

ダーを務めた。それから、石油採掘の中心地ブルドウ湾で同様の研究に取り組むことになり、私は、研究のすべてにわたって計画し、予算を立て、人を雇い、器具を揃え、調査を指導した。アラスカの厳しい辺地で調査にかかわる67人が飢え死にせず、また喧嘩で殺し合わないよう指導するのです。この仕事を通して、研究の上でも人間関係の上でも、多くのことを学び成長した。4人で1つのグループを作り行動したが、厳しい自然環境も加え、ストレスも大きく、“殺し合いをしないように”というのあながち冗談ではありません。」

— グループの人たちの性別は、どんな割合だったのですか？

「それがおもしろいんです。男女半々でした。意図的に性だけを基準に人選したのではなく、結果的にそうなった。ボランティアを募集したのだが、多くの応募者の中で最終的に残った人の中から、できるだけ、女性の適格者を採用した。おもしろいことに、男性の数が女性を少し上回っただけだったので、男4人のグループは1つできただけだった。男女半々の混合チームが、最もうまく行ったように思う。というのは、各人が違った経験を持ち寄れるからだ。好きであろうとなかろうと、男の子と女の子は違う経験をしながら成長する。男性は道具の扱いや修理などが得意だし、女性はキャンプ生活の違った面で得意なことを発揮した。それは料理だとは限らない。キャンプで一番料理の腕が良かったのは、男性だった。これらのボランティア男女は最高のメンバーで、調査が成功したのも、彼らの貢献のおかげだ。彼らは、水産野生動物局のボランティア栄誉賞（レーガン前大統領が作った「誇りあるアメリカ賞」の一環）、さらに内務省の賞も受けた。これはとても感動的だった。

アラスカでの調査の仕事の後、88年に現在の職場であるマサチューセッツ野生動物共同研究所の所長に赴任した。」

まだ見えない差別が

— 野生動物研究は、女性には新しい分野ですね。あなたがこの分野の専門家になるのに、女性運動が助けになったと思いますか？

「そう確信します。アフーマティブ・アクションと雇用機会平等の実施が女性に多くの門戸を開いた。私はその恩恵を受けていると思う。私は78年、カーター政権の終わり頃に政府機関に就職した。カーター大統領はアフーマティブ・アクションにも、雇用機会の平等実施にも熱心に取り組み、私が就職できたのもその結果だ。アフーマティブ・アクションは女性が進出するための新しい起動力

となっている。ブッシュ政権においてもアファーマティブ・アクションは推進されている。」

— 性差別を受けた経験はありますか？

「この分野は伝統的に女性が欠落していたし、私自身、性差別も経験した。1例を挙げると、これは、女性運動が人々の考え方をどう変えたかの良い例だと思うが、ウィスコンシン大学の2年生だった時、医学部進学を考えたが、それは女性運動の前で、女性の医学部進学はまだ非常に少なかった。私は医学部長に会いに行き、医学部進学のためにはどんな科目を取っておけば良いか、尋ねた。彼は科目の説明をした後、こう言った。“もちろん君は女だから男よりも良い成績でなければならない。女は仕事をやめて子供を産むのは明白だから、飛び抜けて優秀でない限り、女子学生を教育する価値はない”って。

こんな会話は今はもう聞かれない。人々の意識は変わったし、差別禁止の法律や規則がある。医学部など公共の機関の長は、今こんなことを言ったら、裁判沙汰になり、法的に苦しい立場に立たされることを承知している。

最も困難な差別は、見えない差別だ。例えば、“ねえ、君、言わなくてもわかるだろう。君はこの会議に出るべきだとは思わないけどねえ”式のほめかし。こんなコメントを言われると、まだ差別の存在を感じさせられる。私は一生懸命に働いているし、家族、友人も励ましてくれるので、カーッとほめない。怒りを自分の中にもため込まず、肩を怒らせもしない。これは大切なことだ。私は、明確な差別がある時は、それを解決するために何かをする。はっきりしない差別の時は、無視する。ただ仕事で最善を尽くすのみだ。」

— 水産野生動物局は、アファーマティブ・アクションに熱心に取り組んでいますか？

「連邦政府の機関は、能力のある女性、少数民族を探している。特にリーダー職に就く女性、より高い地位に昇進させることのできる女性を求めている。でも私は、女性や少数民族は、自分の能力を超えた地位に昇進されることを避けるべきだと思う。自分ができる仕事かどうか確かめてから昇進に同意するのが、私たちの責任だろう。というのは、雇用機会平等に則った人事を行うことで自分の人事管理の得点稼ぎをしようとする上司がおり、女性たちが失敗するようなポストに配置させようとする場合もあるからだ。私は、運良く、現在の仕事も含めていつもチャレンジの多い職に恵まれてきたが。」

— 野生動物共同研究所で働くプロフェッショナル女性の割合は？

「共同研究所は全国に40ヵ所あり、州政府のスタッフ、大学研究者と共に研究する。私は女として初めて所長になったが、ミネソタにも女性所長が就任したので、2人となった(全体の5%)。考えても見て下さい。野生動物庁が1935年に設置されて以来、女性所長が出現するまで50年以上かかったなんて…。私が最初の女性適任者だということではなく、女性が所長になれるということを男性管理職たちが認識するのに、こんなに長い年月がかかったということだ。副所長は現在8人(10%)、専門職レベルでは女性は12%だ。」

— 女性の所長ということで、何か問題はありますか？

「女性であることによって、特別のチャレンジがあることは確かだ。特に、これまで女性のために働いたことのなかった年配の男性を部下に持つのはチャレンジだ。」

— 良い男性上司に恵まれたと思いますか？

「ええ。何人かの素晴らしい上司に出会い、彼らの何人かは私の良き指導者となってくれた。女性の上司はいなかった。女性たちは、良い指導者を持つことは大切だということを理解するべきだ。良い指導者とは、仕事の面で秀でてだけでなく、あなたのためにドアを開けてくれる人だ。あなたは自分で歩いて行かなければならないが、良い指導者はあなたの世界を広げてくれる。良い指導者を見つけ、その指導者との人間関係を育て、最大限にその関係を利用するべきだ。そして、次には自分が誰かの指導者となることも学ばなければならない。私は今、自分が他の人たちの指導者なるように求められる立場になってきた。これはおもしろい責任だ。私は良い師に恵まれたので、他の人たちにも同じようになりたいと思っている。」

私の指導者たちは皆、アフーマティブ・アクションに熱心で、性、人種を問わず、すべての人が平等な機会を持つことができるように、いつも真剣に取り組んでいる。」

— 性的いやがらせの事件が身近に起こったことはありますか？

「ええ。性的いやがらせを受けた人は、とかく、初めは無視したり、否定したりする。それが性的いやがらせだとわかるまでに時間がかかる。性的いやがらせは、全く不愉快な経験だ。難しいことだが、性的いやがらせの申し立てを持ち込む前に、性的いやがらせをする本人に対し、その言葉遣いや行為が自分には不快であることを伝え、やめさせることが大切だ。それから女性も性的いやがらせを招かないように慎重に行動するべきだろう。女性は、自分がどう扱われたいか、

それにはどんな行動が適切なのか、自分をコントロールして、注意深くなければいけない。女性も女性の立場での責任がある。」

— 現在の女性大学院生を見て、どんな進歩があると思いますか？

「私が大学生だった20年前に比べて多くの進歩がある。まずマサチューセッツ州立大学森林野生動物管理学部の女子学生の数の多さに感動している。私が初めて大学院に入った時は、野生動物科で学ぶ女性は珍しかった。私が専攻した動物行動学は、部分的に心理学的な研究で、心理学にはもっと女性がいたから、私の研究も、男性研究仲間を受け入れられたのだろうと思う。」

— 仕事の段階ではどうですか？

「私が水産野生動物庁に就職した時は、管理と調査が主で、男性が圧倒的に多く私は全く小数派だった。しかし、この10数年間に劇的な変化が起こっている。変化はアラスカでも明らかだった。アラスカは遠いので、社会変化の影響が及ぶのにかなり時間がかかる。私がアラスカに行った83年には、アラスカの男性は私をどう扱ったら良いか全く当惑していた。まず第1に、彼らは、どうして女性が生物学者としてそこに居るのか理解できなかつたし、また私をそこへ送った人の考えも理解できなかつた。秘書とか、受付係の女性は数人いたが、私がアラスカで仕事をするプロフェッショナル女性であることを、理解できなかつた。」

ところが、88年の夏に私がアラスカを去る頃には、たくさんの女性生物学者がアラスカ北部に来ていた。彼女たちは、ごく自然に受け入れられていた。たった4年の間にこんなに変化したのです。北アラスカのような閉鎖された小さな社会では、それはもう、劇的な変化だというべきだ。最近、水産野生動物局でも変化があり、ここで働く女性の問題に非常に関心を抱いている。」

知識のアップデートが大切

— どんな問題ですか？

「女性研究者をもっと増やそうとしているが、一方で、女性研究者が長い期間勤務しないという問題がある。そこで、この分野での女性の役割を評価するために、昨年1月に会議を開いた。今春にもまた話し合う。どうすれば女性と少数民族をもっと増やすことができるのか？ また女性が働き続けられるように、どんな援助が必要か、という家族とキャリアの両立問題は常に存在する。20代、30代の多くの女性は子供を持ち始める。1日は24時間しかないのに、子育てしながら、(野外での調査研究の多い動物学者としての) キャリアに全面的に打ち込むのは

非常に難しい。

私は、研究のために、子供は産まないことにした。子供を産まなかったことを後悔していない。現地で調査研究する生物学者として、自分の研究に専念したかったからだ。とにかく今の生活が大好きだ。確かに、子供を産むか産まないかは、難しい選択だったが、私は教育を通じて若い人々を育て、自分の得たものを伝えていくことができると考えている。

若い女性が子供を産むために仕事を一時やめる場合、専門分野の勉強を続けていけば、また後に仕事に戻れるだろう。職場復帰できるかどうかは、子育ての間に彼女たちが何をしていたかによる。キャリア開発のプログラムを考える必要がある。障害にぶつかるのは、専門分野の進歩に遅れてしまった女性の場合だが、でも職場復帰のための訓練を受ければ、また何か貢献できるかもしれない。しかし、職場を10年、15年間も離れ、その間知識をアップデートしなかった人たちをどう使えるだろうか？ 女性はキャリアと何を優先させるのか、自分自身の選択を持つべきだ。ほとんどの夫婦は、共働きする必要があるのだから、夫の仕事、夫がどの位育児を分担するのか、夫婦がどの程度お互いに譲り合えるのか、良く話し合う必要がある。」

— 90年代の女性が直面する問題は何でしょうか？

「やはり最も難しいことは、共にプロフェッショナル（通常、大学で専門的な資格を得て、その専門分野の仕事に就いている人を指す）である共働き夫婦の問題、子育ての問題だろう。ほとんどのプロフェッショナル女性は、職場で、将来の伴侶にめぐり会うと思う。相手もプロフェッショナルで、共通の話題があるような男性に惹かれると思う。その時、お互いに専門的な仕事を持つ者同士が、プロとして転勤問題などにどう対処していくか、どんな関係を持ち続けるかが焦点になるだろう。それから子育てとキャリアの両立の問題。これは夫婦の個人的な判断に任せられるべき問題だが、社会や会社、研究所などの組織も、この判断を援助していくべきだ。何故なら、これは雇う側にとっても重大な問題だからだ。良い人材が必要なのに、おしめを10年間も洗っていた人を雇うわけにはいかない。」

女性の進出は変化をもたらす

— 女性の野生動物の分野への進出は、どんな変化をもたらしましたか？

「この分野で女性の存在を見るのは、全く心がときめくことですよ。女性は、この分野に、男性が持っているのとは違う、多くの新しい知識や感受性をもたら

した。歴史的に、男性は一般的に、主に狩猟、捕獲を中心にしてきた。野生動物の管理にもそれは反映されている。確かに、野生動物に最も関心を寄せているのは狩猟や漁業をする人たちで、がちょうのスタンプや魚釣りライセンスの購入（魚釣りには許可証を必要とする）を通して、財政的に野生動物の保護管理を支えている。この分野に入ってくる女性の何割かは狩猟をする。私自身、野生動物学者になるためには、狩猟をすることが必要だと言われ、2、3度狩猟に行った。しかし、こういう考え方は変わってきたと思う。狩猟が野生動物学者になるための条件だとは思わない。狩猟、漁業、捕獲は、野生動物の生息数を管理するために重要なことではあるが、学者になる条件ではない。

それから、人事管理の方法も、女性進出によって変化が起こった。確かに、非常に激しい性格の女性もいれば、非常に優しい性格の男性もいる。しかし、一般的に言って、男性は、脅かすというのは強い言葉だが、女性よりは威嚇的な方法で人事管理をしてきたと思う。女性はよく人の意見を聞き、問題を解決しようとする傾向がある。それはある時には良い方法だけれども、そうでない時もある。上司は時には強く出て、はっきりと「こうするべきだ」と言うべきだと思う。ところが、女性は衝突を避けるために遠回りしがちだ。男性はもっとすばやく行動すると思う。もちろん例外もある。私は、この分野で実にさまざまなタイプの人に会ってきたが、私が持った上司の中で最も素晴らしいと感じた人は男性で、物腰がいつも柔らかく、人事管理に卓越していた。女性たちは、ソフトな態度が人事管理面で非常に良い効果を上げるのだ、ということをおの分野の人々に示していると思う。」

注：大学、公共機関等には、アファーマティブ・アクションを監督する部署が置かれ、性的いやがらせと思われる行動についてもそこに申し立てすることができる。まず監督官に事情を説明し、性的いやがらせだと判断されると、その申し立てを書類に記録し、登録することができる。また性的いやがらせを行う者が呼び出され、事情聴取される。普通は勧告程度であるが、性的いやがらせの内容が女性差別だと判断されたり、レイプに至るケースなど、その程度によっては解雇されるケースもある。申し立てが登録されたり、勧告されると、昇進に否定的な影響を及ぼす。

横田啓子は、現在マサチューセッツ州の Amherst College のアジア言語文明学科の日本語、日本文化の専任講師である。